

# 教 名 聞

第73号  
(発行日)  
2016年10月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》  
○ 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日 午後3時始  
○ 〈聖典学習会〉  
毎月6日 午後7時始。  
○ 〈真宗入門講座〉  
毎月18日 午後6時30分始。  
\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 自己保身の心

人の心に深く根を張っているのが自己愛、自己保身の心です。

先日、沖縄の基地問題で、沖縄県知事が政府のやり方を訴えた裁判で、裁判官の判断はかなり政府寄りの判定でした。過去のいろいろな裁判でも同様ですが、裁判所の判定はとかく政府よりの裁定が多いように思います。

これは私の偏見かも知れませんが、裁判官の判定の中には裁判官自身の自己保身が含まれているのを時々感じます。判定は本当に公正なのか、それを疑う判定をいくつも経験しましたのでそう感じるのです。

というのは、判断を下す人は、仏様ではなくて凡夫としての裁判官です。ですから、もし政府見解に反した判定をするとその裁判官の将来（出世など）になんらかの影響があり、それを考慮してなされる判定が無いとはいえません。東大法学部を出た優秀な知人がいましたが、彼はかつての東大での大学紛争で反政府

的な行動をとったので、卒業後の人生は社会的な位置には恵まれなかったように思います。逆に自己保身で権力にうまく寄り添って立ち回った人たちが国家権力の中枢に近くいて重く用いられる場合があるのではないでしょうか。

今日、テレビや新聞などのジャーナリズムの世界でも、政府批判をするような評論家や学者は遠ざけられて、マスコミを賑わせているのは時の政権に「どっこいしょ」の知識人やタレントが多いように感じます。

アメリカで9・11事件が起こりニューヨークの高層ビルがイスラム教徒によつて破壊されたとき、「報復せよ」の声が湧き上がり、マスコミを挙げて「イラクをやっつけろ」となつてイラク戦争へとつっぱしていききました。民主主義大国と言われるアメリカですら、こうした世の声に反対するジャーナリストはいたと思えますが、沸き立つ怒りの渦の中では、彼らは自らの声を上げなかつたように思いま

した。そこにもジャーナリストの自己保身の姿を感じるのです。こうした行動に潜んでいる自己保身の心、自分と家族を守る意識、これは決して特定の人の話ではなくて、こういう私の中にも、また一人一人の中にも根を張っているように思えます。

そういう凡夫が集まって社会を作っていますので、いつまでもたつてもこの世は浄土にはならず穢土のままです。

けれども私たちは、この穢土に働いて下さる清浄な世界（浄土）からの光（教法）に照らされています。

その光は、穢土を作っている我執我愛の自己保身の私たちの心を反省せしめ、少しづつでもあるべき社会へと向か

## 《念佛寺報恩講》

十二月二十二日（木）

午後二時始

講師

滋賀県・大谷派玄照寺住職

瓜生 崇師

\*なお同日十二月二十一日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。

わけて下さるはたらきをして下さっているのであります。

更に、私たちの自己保身の心を問うてみますと、次のようなことがうかがわれます。この心は人間だけではなく、魚もトンボもネズミにもあります。近づくことと皆さつと逃げます。生き物はすべて自らのいのちを護ろうとしています。死にたくないのです。

私たちのいのちに自己保身の意識があるのは、そのもとは皆「死にたくない」からでしょう。

それは裏からいうと、死にたくない心は死なないのちが欲しい、いわば永遠のいのちを求めているのではないのでしょうか。それが生きているものの根源的な願いだと思

ます。

この願いは有情（生き物）の根源の願いですが、しかし人間以外の動物などの存在（衆生）はどうやらこの願いを自覚できないようです。

自覚して、しかも永遠のいのちを求めることができるのはまず人間でありましょう。だから人間に生まれたということとは「どこまでも生きたい」「死なないのちになりたい」という根本欲求を実現すべく生きているといえます。

それはいわば「仏（無量のいのち）になりたい」、すなわち「仏になるべく」生きているといえます。

衆生の根源的欲求（宗教的欲求）を実現し仏になることこそ、仏法であります。

にもかかわらず、「生きたい」という限らない欲求を、健康で長生きを」という肉体のいのちへの願望（執着）に留まり続け、自己保存欲に潜む根本的欲求（宗教的欲求）からそれてしまうところに、罪や苦を超えられずに、人の生を終わってしまうのではないのでしょうか。

（了）

# 阿彌陀仏の御名をきき

（和讃問答）

阿彌陀仏の御名をきき

歡喜讚仰せしむれば

功德の宝を具足して

一念大無上なり

（浄土和讃）

現代語訳（阿彌陀仏の名号を聞いて、喜びたたまつれば、その功德は我が身に具わって、一声の信心の称名にもこの上ない涅槃のさとりを得る利益をこうむる）

典拠—『仏説無量寿経』

〈仏、弥勒に語りたまわく、それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん。まさに知るべし、この人は大無上を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなりと〉

\*

N 「阿彌陀仏の御名をきき」とは」

D 「南無阿彌陀仏という阿彌陀仏の名号を聞く、ことです」

N 「なぜ、御名を聞くのですか」

D 「如来法蔵様（阿彌陀仏）」

そのものが形を取り、南無阿彌陀仏の言葉となつて喚び

は愚かな私たちに、真実の言葉、大慈悲のこもった言葉、救いの言葉、すなわち南無阿彌陀仏の言葉となつて喚びかけ、喚びづめでありましょう。

それによつて、衆生は必ず気がついてくれる、仏とであることが出来る」と、働きづめに働いて下さっているのではありません。その御名を聞くのです」

N 「南無阿彌陀仏となつて喚びかけられている、それによつて私たちは阿彌陀仏に出会うのですね」

D 「ええそうです。無量無辺の阿彌陀仏が南無阿彌陀仏という真実大悲の言葉とまで縮まって私たちに御自身を露わにして下さる。それによつてはからずも、私たちのように真実を知らず右も左も分からぬ愚鈍の身も阿彌陀仏にお会いすることが出来るのです」

N 「有難いですね」

D 「ええ。曾我量深先生の言葉に

〈南無阿彌陀仏は生ける言葉の仏身なり〉

とあります。生きた阿彌陀仏

かけたもうのです」

N 「南無阿彌陀仏の言葉が阿彌陀仏そのものなのですね」

D 「ええそうです。ですから南無阿彌陀仏の言葉に出あうことが阿彌陀仏に出あうことであり、阿彌陀仏の大悲心に出あうことなのです」

N 「阿彌陀仏に出あうということは阿彌陀仏のお心に出あうのですね」

D 「私たちの本質は心です。それも凡夫の心（凡心）です。この心に南無阿彌陀仏の仏心が出あいたもうのです。心と心が出あつて、融合するとい

うか離れなくなるのです」

N 「不思議ですね。なぜそういうことが可能なのですか」

D 「分かりません。不思議としかいいようはありません。仏の心は私の心の中枢に届いて下さるのです。仏の慈悲心、あわれみ、情けが余りに深く

廣大であつてその大慈大悲のあわれみが凡心に浸透して流れ込んで下さるからではないでしょうか」

N 「その阿彌陀仏の大悲のお心はどこに示されていますか」

D 「釈尊の説かれた『仏説無量寿経』にです。そこに阿彌陀仏の本願、四十八願が説かれてあります。その中でことに第十八願に仏の大慈悲心がよく表されています」

N 「それはどんな内容ですか」

D 「第十八願文の中で（乃至十念 若不生者 不取正覺）というお誓い、ここに阿彌陀

仏の窮まりなき大悲心が表されてあります。このお心については今まで何度も申し上げました」

N 「我執・我愛と疑惑の罪によつて、生死流転し続けてきた私たちに、如来法蔵様が（ただ称えるばかりで浄土に生まれさせる）すなわち（そのままなりでまるまる助ける）という絶対救済のお言葉ですね」

D 「ええそうです。驚くべき大悲のお心です」

N 「（ただ称えるばかりで助ける）という丸だすけのお心をどこで聞くのですか」

D 「あなたが念仏する、そこに聞くのです」

N 「口に称えている念佛の声において聞くのですか」

D 「ええそうです。それが一番具体的です。ナムアマミダブツと称える、その一声一声のお念仏は（称えるばかりで助ける）という阿彌陀仏の大慈

悲心の現れ、すなわち仰せです。一声一声のお念仏は阿弥陀仏が（助ける、助ける）の仰せです」

N 「南無阿弥陀仏の一声において大悲を聞かされるということですが、まずお念仏を称えることが始めにありますね」

D 「ええそうですね。ですから古来諸仏方が、（お念仏を称えよ）とお勧め下さるのです。なぜ（お念仏申せ）と伝えられてきたかというと、仏法のお話しを聞くだけは仏法が観念化しがちです。具体的な行を通さないと身につかないということを経験菩薩はすでに知りぬいておられて、お念仏で救おうというご本願を建てられたのではないでしようか」

N 「ともかくまずお念仏を称える。そうするとお念仏の音が耳に聞こえる。その一声のナムアマダブツのお声において、大悲心をお聞かせをいただくのですね」

D 「それが（阿弥陀仏の御名をきき）なのですね」

N 「ええそうですね。ただ、この（御名をきき）は、南無阿弥陀仏を聞くのですが、南無阿弥陀仏のお心（仏心大悲）が本当に身にしみて聞かえた、といういわば（聞き受けられ

た）という、そういう（きき）なのですね」

N 「単に耳にナムアマダブツの音声が聞こえるというのではなく、ナムアマダブツにおいて阿弥陀仏の大慈悲心を知らしめられた。初めて（ああ有難い）と聞き受けられたということなのですね」

D 「ええそうですね」

N 「では（歡喜讚仰せしむれば）とは」

D 「南無阿弥陀仏の仰せである（そのままなりで助ける）の仰せを聞いて、ああ有難い阿弥陀様なればこそ、ようこそようこそ、と阿弥陀仏の大悲を喜び阿弥陀仏を讃えることとです」

N 「阿弥陀仏の本願の仰せを聞けば、有難いと受けとられずにはおれないのですね」

D 「ええ、この阿弥陀仏との出あいの喜び、これに越した喜びはないですね。これに較べたら、この世の喜びは一時的なものであり、感覚を楽しませるだけの底の浅い喜びがほとんどでしょう」

N 「飲んだり食べたりする喜び、映画や音楽を聴く喜び、スポーツを楽しむ喜びなど、ずいぶん沢山の喜びや楽しみが世の中にはあります。へ人生

は楽しむためにあるのだ」という人生観を語る人もずいぶんいます」

N 「それは、見たり、聞いたり、食べたり、触れたりする五つの感覚を刺戟して快感を求めているともいえるでしょうね」

D 「ええ、そうですね。こういう現代の特色はニヒリズムだといえます。いわゆる（何のために生きているのか意味が分からない。生きる本當の意味なんてない、生きる意味を求めてもしかたがない。生きる意味は分からなくても色んな楽しいことや面白いことがあるので、それらを求めるだけ）という、それがニヒリズムの特徴だと思います。もう一ついえば（神も仏もない、死んだらそれでおしまい。生きていくうちに楽しいことを一杯して、死ぬときに後悔のないようにしたい。健康でお金がないとそれもできないから、健康とお金が一番大事）という、そういう人生観です」

N 「死ぬのはしかたがない。死ぬまでは楽しみたい。だからお金と健康が一番大事というのですね」

D 「そういう人生観を支えているのが自然科学的な物質中心の見方であり、経済中心主

義の現代社会の潮流ですね」

N 「では生きる意味は仏教ではどう説かれるのですか」

D 「一言で言えば、真理を求め真理に目覚め真理にそって生きよ、というのです。真理を仏といってもいいです。ですから人生は仏にあり、仏になるために生きる、いわゆる成仏道を歩むための人生と教えられます」

N 「ずいぶん、堅苦しい道ですね」

D 「そう見えますが、一方で仏法は安樂の法門といわれ、本當の樂、毀れない樂、窮極の樂（極樂）を実現する道なのです。この世の娛樂・道樂・快樂は確かに楽しいですが、一時的でその場限りの場合が殆どであり、またすぐ物足りなくなります。それを繰り返していきます。しかも楽しみが沢山ある人生においても、老病死を免れませんか心の底に不安とかやりきれなさとか憂いをかかえています」

N 「そうですね。それと現実の人生は楽しいことばかりではなくて、結構苦しいことや悲しいことが多いのも事実で、そうなるとうちに毀れなく、心から満足できる喜びは何かと問うてみるとこの世の中に

はそういうものはないですね」

N 「では次に（功德の宝を具足して 一念大利益なり）とは」

D 「阿弥陀仏の本願を信じた人は信じたその時、阿弥陀仏の功德の宝をいただいた、この上ない仏にらしめられるのである、と釈尊が讃えて下さるのです」

N 「では、本願を信じたら、無上の功德を自分は身にいただいたのだと実感できるのでしようか」

D 「実際には、無上大利といわれるほどの大功德を実感することは難しいのではないでしようか」

N 「ではなぜ、功德の宝を身にいたたくとかこの上ない大きな利益をいたたくとかいわれるのでしようか」

D 「念佛を信じる人にはこの上ない尊い功德を身にいたきたのだよ、と釈尊は、それほど功德と知らない私たちに恵みの大いなることを教えて下さるのでしよう」

N 「ということは現在、弥陀の本願を信じてそれほどの功德をいただいたとは感じなくても、弥陀の本願を受けいれた人は、大いなる利益いわゆ

る仏になるといふ利益をいた  
だいた身ですよと、釈尊が教  
えて下さるのですね」

D 「ええ、それほどの利益が  
あることを教えて下さり、そ  
れゆえ弥陀の本願を信じよと、  
大衆にお念仏を信じることが  
お勧め下さるのではないでし  
ょうか」

N 「お念仏の功德は莫大なこ  
とを説かれ、一切衆生に本願  
を信じ念仏申すことをお勧め  
下さるのですね」

D 「そうお聞きしてます。ご  
く卑近な喩えでいえば、家の  
庭を掘っていると、ある日突  
然に地下からお湯が沸き出し  
た。湧き出たお湯の量は少し  
であつても、専門家が、地下  
には限りない量の湯脈があつ  
てお湯が出続けると教えて下  
さるようなものです。地上に  
出てくるお湯は毎日少しでも  
その源は量り無い量であるよ  
うに、日々のお念仏の功德は  
たとえ少ししか感じなくても、  
お念仏の功德はこの上ない無  
量の功德に連なっているのだ  
す。そのことを知らない私た  
ち、また未だ信じていない人  
に、お念仏を聞信する一念に  
たまわる利益は無上の功德だ  
と釈尊はお知らせ下さり、お  
勧め下さるのでありますよ」

(了)

## 任職雑感

九月二十四日、高校三年の同じク  
ラスだけの同期会に参加した。JR  
岡山駅の近くの料理屋で八名ほどが  
集まった。物故者は九名ほどいて、  
同期の二割程度がもうこの世の人で  
は無い。どこへ行ったのであろうか。

最初に物故者への黙禱。二〇年ほど  
中国の上海や南京大学で日本語を教  
えてこの七月に帰国した者、地方の  
新聞のコラムを書き続けている者、  
歯医者をしている者、市の社会福祉  
協議会の会長をしている者、東京の  
商社をリタイアして郷里に帰って  
農業をしている者、東京で事業をし  
郷里に帰ってきた者など多彩で  
ある。隠居老人のような人はいない。  
皆戦後の貧しい時代から、高度成長  
期そしてバブル崩壊を生きぬいてき  
た者たちばかりである。

続いて十月一日にも中学校の同窓  
会に十年ぶりで出席した。同窓会の  
案内があつても何かしらの用事でな  
かなか行けないのだが、今回は二つ  
も出席した。一番感じたのは出席し  
ている人が私より元気そうな者たち  
ばかりで、自分の老化の進みの早い  
のが実感させられた。五十五名の参  
加で、卒業以来の人も結構いた。円  
卓テーブルにクジで坐り、ちょうど  
右隣りに小学校も同じだったF君と  
同席、左隣りはまったく憶えのない

女性であつた。出席している女性は  
お化粧して着飾っている人もいれ  
ば、ふだん着のような日常の姿で出  
席している人もいた。飾り気のない  
姿で出席する人に何かしら尊敬の念  
をおぼえる。私も同窓会への出席と  
なると散髪ぐらいはしてやはり見栄  
えを良くし、若く思われたいとい  
う煩惱が湧くからである。そして慣  
例の集合写真を撮った。この場でも  
より良く映りたいという煩惱が起こ  
る。我愛の心の強いことは人の中に  
出るとよく分かる。時々はどういう  
場所に出て自分の心がどう動くかを  
知るのもいい経験である。アトラク  
ションが途中であつたが、それには  
皆さんあまり興味がなさそうでお喋  
りに夢中であつた。同窓会でいいの  
は、それぞれの社会的な位置や学歴  
や仕事の如何に関わらず、「おい、  
お前」と気さくに話が交わること  
である。これは親族以外の関係では  
なかなかないことである。会も後半  
になつて、一人一人が壇上に立つて  
一分以内に近況を報告する。私は最  
後から二番目であつた。それぞれの  
話は自分の体の健康についてが一番  
多い、そして子や孫の話である。現  
在もクスリを一つも飲まずに生活し  
て百才迄は生きるつもりという話も  
あつた。私は特に話すことも無かつ  
たが、「七十才を過ぎて、もう充分  
に生きたという思いになった。生き  
足らないということはなくなった。  
中学時代に自分が問題となつて以

後、仏教にであつて坊主をずっとや  
つてます」と簡単に述べた。話した  
後で、「それじゃあ君はいつ死んで  
もいいのだな」と思われそうで、「ま  
だまだ生きたいという心も当然起こ  
る」ことを話しに付け加えるのを忘  
れてしまったのであつた。中学時代  
一番仲が良かった友は誰も来ていな  
かつた。一人は入院中と聞く。いろ  
んな事情でやむを得ず出席できない  
人も沢山いたに違いない。どうして  
いるのであろうか。往復、長時間高  
速バスに乗つたので、かなり腰にこ  
たえた。

(了)

### 〈遠方法話予定〉

十月十三日～十五日。福井別院。朝事後法話  
と午後法話・座談。宿泊可(☎〇七七六・二  
一・四四四)

\*十月十九日。名古屋市中川区。坪井氏宅近  
くの開法会館

午前十時法話・午後座談

\*十月二十三日～二十五日。札幌別院報恩講

法話

\*十一月二十三日～二十四日。石川県金沢市。

名聲寺。午後から午後迄

\*十二月十日から十一日。姫路市。西源寺。

夜から午後迄。

\*十二月十七日。福井別院。午前十時法話・

午後座談

平成二十九年

一月十五日。十時。芦屋仏教会館

(詳しくは念佛寺の方にお問い合わせ  
下さい)

### NHKラジオ第二放送「宗教の時間」

『木村無相さんを偲んで』 土井紀明

十一月六日(日) 午前八時半

三十分間

(再放送) 十一月十三日(日) 午後六時半

### 《お知らせ》

十一月六日の共学会(午後七時)  
は十一月五日に変更いたします。